

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 23 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370014

研究課題名(和文)『孟子古義』諸稿本の分析による伊藤仁斎倫理思想の研究

研究課題名(英文)Study of Ito Jinsai's ethic thought by the analysis of manuscripts "Moushi-Kogi"

研究代表者

遠山 敦 (TOHYAMA, Atsushi)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：70212066

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代の儒学者伊藤仁斎の倫理思想は、主として朱子学に対する批判的な検討に基づく経書注釈によって形成されていった。本研究では、特に仁斎による『孟子』注釈、すなわち『孟子古義』に焦点を当て、仁斎自身がその成立に関わったと考えられる四種類の稿本に基づいてその成立過程を辿りながら、仁斎倫理思想の中核となる「性」論(性善論)、「天命」論、「王道」論が、朱子学をどのような観点から批判し形作られていったかを明らかにするとともに、併せて未だ刊行されていない『孟子古義』の仁斎生前における最終形態の確定を行った。

研究成果の概要(英文)：Jinsai Ito, a Confucian scholar in Edo era, formed his ethical view by commenting classic Confucian writings. The commentaries were based on his critical examination on Cheng-Zhu school. In particular, my research focused on Jinsai's commentaries on the Discourses of Mencius, namely "Moushi-Kogi", and traced how it was shaped by examining four manuscripts in which Jinsai himself engaged. Through this research, I clarified how the core of Jinsai's ethical view (the theories of human nature, providence, and righteous government) criticized Cheng-Zhu school and how it was established. Finally, I identified the final unpublished form of "Moushi-Kogi" written during Jinsai's lifetime.

研究分野：人文学

キーワード：伊藤仁斎 倫理思想 『孟子古義』

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、これまで江戸時代の儒学者伊藤仁斎の倫理思想研究を継続的に行ってきた。仁斎倫理思想の研究は既にこれまで多くの先行研究が行われてきたが、そうした研究は主として晩年定論としての『童子問』及び『語孟字義』をテキストとして進められてきた。だが仁斎学が、朱熹『集注』の批判的検討に基づく息の長い経書解釈作業に基づき形成されてきたことを考えるとき、より深い理解を得るためには、その経書注釈、即ち『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』『大学定本』がどのような過程を経て晩年定論へと結実していったかの分析が不可欠である。しかし一方で、現在刊行されているそうした経書注釈書は晩年定論のみであり、しかもそれらは仁斎没後、その子伊藤東涯や門人らによって校訂を加えられたものであって、仁斎自身の最終稿とは隔たりがあり、またその他の稿本類については影印すら刊行されていない。こうした状況を踏まえ、研究代表者は、平成16～18年度、科学研究費補助金に基づく『『中庸』解釈から見られる伊藤仁斎の倫理思想に関する研究』(基盤研究(C))を行った。そこでは、第一本から元禄七年校本に至る5種類の『中庸發揮』諸稿本における注釈の変遷を跡づけ、そこに彼独自の思想形成がどのように展開していったのかを、性・道・教という基礎概念の相互関係、「中庸」及び「誠」概念の形成過程を中心に考察を行うとともに、それまで小注を除いた形でしか刊行されてこなかった『中庸發揮』全文について、仁斎生前の最終形態を示す元禄七年校本校訂文を底本として、書き下しと共に現代語訳を行った。仁斎研究においては、こうした経書注釈の分析が不可欠であり、上記『中庸發揮』と同様の研究が『論語古義』『孟子古義』『大学定本』を対象としても必要であるという認識が、本研究の出発点である。

## 2. 研究の目的

(1)伊藤仁斎の倫理思想は、主として朱熹『集注』に対する批判的な検討に基づく経書注釈によって形成されていった。それらは具体的には『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』『大学定本』として結実していくことになるが、そうした注釈を通じて仁斎は、朱子学が絶対的な経書とした『大学』を孔子の書にあらすとして否定すると共に、独自の観点から、『論語』に描かれた人倫的世界像を絶対的なものと捉え、同書を「最上至極宇宙第一の書」とまで位置づけるに至った。だがこうした『論語』評価の背後には、『孟子』及び『中庸』に対する独自の解釈が控えており、とりわけ『孟子』については「学者『孟子』を熟読せざれば、必ず『論語』の議に達すること能わず」(『童子問』上第七章)と述べ、それを「『論語』の津筏」(同上)と位置づけている。『論語』を最高の経書とする仁斎学の立

場は、いわば『孟子』を注釈として『論語』を解することによって確立したと言えるのである。こうした仁斎学の性格は、性善説とそれに伴う仁義礼智釈、王道論、天命論などの『孟子』の主要テーマが、その学の骨格を形成しているという事態に、顕著に反映している。本研究は現存する『孟子古義』諸稿本の分析を通じて、仁斎学の骨格に関わる諸概念がどのように形成され、どのように独自の意義を持つに至ったかを明らかにすることで、仁斎の倫理思想の一端を解明しようとするものである。

(2)上記のように仁斎学にとって極めて決定的な意義を持つ『孟子古義』だが、しかしながら現在、その確定的なテキストは刊行されていない。本研究は、現存する諸稿本の分析に基づいてテキストの仁斎生前最終形態を確定し、今後の研究に資することを併せてその目的とする。

## 3. 研究の方法

(1)現在、天理大学附属天理図書館古義堂文庫に所蔵されている『孟子古義』の4種類の稿本、即ち仁斎自筆あるいは仁斎が直接その著述・校訂に関わった「自筆本」「元禄十年重訂本」「元禄十二年改修本」「林本」のいわゆる「正本」について、研究初年度は「巻一梁惠王」「巻二公孫丑」を、二年目は「巻三滕文公」「巻四離婁」「巻五万章」を、三年目は「巻六告子」「巻七尽心」の各篇をそれぞれ中心に、成立過程の分析を行う。

(2)分析を行うに当たっては、仁斎生前最終形態と考えられる「林本」について、テキスト確定を行う共に、書き下し文を付し、今後語釈などを加え刊行が可能となるよう、体裁を整える。

(3)上記(1)の稿本成立過程の分析と並行して、特に以下の事項に関して集中的に思想的観点からの精査・分析を行う。

「巻一梁惠王」篇を中心に展開される「王道」論について、特にそこで展開される「仁義」把握の特質を、朱熹『孟子集注』及び『朱子語類』当該章、並びに趙岐注(古注)における「王道」理解などを比較対象として参照しながら、仁斎思想の独自性を解明すべく努める。

「巻五万章」篇を中心に展開される「天命」論について、特にそこで展開される「天」と「命」とを異なった観点から捉える把握の独自性を、朱熹『孟子集注』及び『朱子語類』当該章、並びに趙岐注(古注)における「天命」理解などを比較対象として参照しながら、仁斎思想の独自性を解明すべく努める。

「巻六告子」篇を中心に展開される「性」論(性善論)について、特にそこで展開される「四端の心」と「情」に対する理解の

特質を、朱熹『孟子集注』及び『朱子語類』当該章、並びに趙岐注(古注)における「性」理解などを比較対象として参照しながら、仁齋思想の独自性を解明すべく努める。

#### 4. 研究成果

(1)これまで確定的なテキストがなかった『孟子古義』について、仁齋生前最終形態を伝える「林本」を底本としたテキストを翻刻するとともに、書き下しを加え、今後の研究の基礎的な資料とする作業を完了した。ただし林本は「巻二公孫丑」篇を欠くため、その部分については、林本の筆写者である林景范の浄書本をもとに作成され、林本に近似すると考えられる「定本」(古義堂文庫整理番号3-11)を底本とすることとした。なお林本は、原文に、仁齋だけでなく東涯筆の校訂も書き加えられているが、ほとんどが字句の訂正に関わるものであるため、基本的にその部分も最終形態を示すものと考え、テキスト作成を行った。

(2)「梁恵王」篇を中心に展開される「王道」論については、最も初期の形態を示す「自筆本」の段階において、既におおよそ晩年定論の解釈が示されており、仁齋学の成立にとって最も基底的な問題であったことが理解できる。晩年定論の仁齋の王道解釈は、民と「好悪(憂楽)を同じゅうする」ことだと端的に説かれる。それは例えば「古の人は民と偕に楽しむ。惟だ一章の大指なるのみに非ず、乃ち王道の本原。」「蓋し民と偕に楽しむときは則ち興り、民と偕に楽まざるときは則ち亡ぶ。」(梁恵王上、第二章)などと言った表現に窺うことができる。そうした王道解釈が最も端的に表れるのが梁恵王下篇第五章である。色・貨を好むと述べる齊の宣王に対して「王如し色を好んで百姓と之を同くせば、王に於いて何か有らん」と応える孟子について、仁齋は次のように論じている。「民の楽を楽しむ民の憂を憂う、王道の至要なり。故に孟子、宣王の貨を好み色を好むの疾有りと言うに於いて、皆に言う、民と之を同じくすれば王において何か有らんと。蓋し宣王の貨を好み色を好むは乃ち一己の私にして、孟子の謂う所の貨を好み色を好むは実に天地の心なり。謂う所の楽しむに天下を以てす、是れなり。是の故に聖人天下の志に通じ天下の情に達し、欲する所、之と与にし之を聚む。悪む所は施すこと勿く、民と之を共にせざる莫し。苟も其の好悪己に在らずして百姓と之を同くするときは、則ち天下の事、大無く小無く、往きて王道に非らざるは無し。区区たる天理人欲の弁、豈に以て王道の大を論ずるに足らんや。」ここに示されているように、仁齋にとって王道は、好悪・憂楽の情を「一己の私」のものとしてでなく「天下の情」と捉え、そうした情を民の中に推察しそれと同化していくこととして捉えられる。こうした王道の理解は、仁齋が批判の対象とした朱熹の理解と著しい対照をなしている。上述の文末に

「区区たる天理人欲の弁、豈に以て王道の大を論ずるに足らんや」と批判される朱熹の、同じく梁恵王下篇第五章の「集注」には、次のように述べられている。「…好货・好色の心、皆な天理の有る所にして人情の無きこと能わざる者。然れども天理・人欲、同行異情。理に循いて天下に公にするは聖賢の其の性を尽くす所以なり。欲を縦にして一己の私にするは衆人の其の天を滅する所以なり。二者の間、髪を以てすること能わずして、其の是非得失の帰、相い去ること遠し。故に孟子、時君の問に因りて、機微の際を剖析す。皆な人欲を遏めて天理を存する所以。」ここに見られるように、朱熹にとって王道は、「人欲」としての好货・好色を防遏し、内的な道徳性、即ち「天理」=「性」としての好货・好色の心を確立することだと捉えられる。即ち朱熹にとって王道は、為政者がその内的な道徳性を確立することにおいて成立するものと捉えられているのである。こうした朱熹の解釈は、梁恵王上篇冒頭第一章の、「仁は心の徳、愛の理。義は心の制、事の宜しき」という仁義解釈にも端的に表れている。同箇所を仁齋は「慈愛の心、内外・遠近至らざる所無し、之を仁と謂う。其の当に為すべき所を為し、為す可からざる所を為さず、之を義と謂う。蓋し天下の達徳にして聖人之を立て以て人道の極と為すなり」とする。仁を内的な徳としてでは無く、広く人倫世界全体に成立する「天下の達徳」と捉える仁齋の立場をそこに見ることができる。ただし、同箇所の『孟子古義』自筆本には「仁は人の美德、慈愛惻怛、物と間無き者なり。義は人の正路、断制裁割、各おの条理有る者なり」とあり、仁を「人の美德」と捉える点で、なお宋学の影響下にあり、晩年定論との理解の隔たりを認めることができる。

(3)「万章」篇を中心に展開される「天命」論については、初期形態の自筆本と最終形態の林本の間大きな隔たりを認めることができる。晩年定論における仁齋の「天命」理解の特質は、「天」(天道)と「命」(天命)を明確に異なるものと捉える点に存する。仁齋が天命についての最も端的な表現とする「之を為ること莫くして為る者は天なり。之を致すこと莫くして至る者は命なり。」を載せる万章上篇第七章『孟子古義』では、次のように語られる。「堯舜の子皆な不肖にして、舜禹の相為る久し。故に堯舜の子、天下を有たずして舜禹之を有つなり。禹の子賢にして、益の相たること久しからず。故に啓天下を有ちて益は之を有つことを得ざるなり。「之を為ること莫くして為る者」は、人力の及ぶ所に非ざるを謂うなり。「之を致すこと莫くして至る者」は、人力に出づるに似て、実は人力の与る所に非ざるを謂うなり。」当該章では、堯・舜の帝位がそれぞれ宰相であった舜・禹へと禅譲されたのに対して、禹の帝位は宰相だった益にではなく禹の子啓に世襲されたことが問われている。その原因は、

堯・舜の子がそれぞれ不肖であり宰相であった舜・禹の在任期間が長かったのに対して、禹の子啓は聡明であり、また益の宰相としての在任期間が短かったことが挙げられる。このことに連関して、「之を為ること莫くして為る者」即ち「天」は「人力の及ぶ所に非ざる」もの、「之を致すこと莫くして至る者」即ち「命」は「人力に出づるに似て、実は人力の与る所に非ざる」ものとされるのである。そして仁斎は、さらに次のように述べる。「蓋し禹の益を天に薦むること、猶を堯舜の舜・禹を天に薦むるがごとし。三聖の心、豈に異なること有らんや。唯だ禹崩じて後、民心益に帰せずして啓に帰す。此れ啓の世を継ぎて王たる所以にして、禹の子に与うるの意有らざること明かなり。蓋し之を天と謂うは、人に対して言う。人事の与る所に非ずして、自然にして然り。故に之を「為る」と謂うなり。命は天の命ずる所、時に臨みて至る。故に之を「至る」と謂うなり。孟子、舜・禹と啓の天下を有つ所以、益の天下を有たざるに於いて、皆な天を言いて命を言わず。蓋し其の事を重んずるのみ。時に臨んで至るの類に非ざるなり。」仁斎によれば、賢者に帝位を伝える意志に関しては、堯・舜・禹の三聖ともに同様であったが、子の賢愚や宰相としての在任期間には相違があった。禅譲・世襲の違いが子の賢愚や宰相としての在任期間によるものである限り、それは「人事の与る所に非ざる」ものであり、従って「天」の問題である。それ故に孟子はこの問題に関して「天を言いて命を言わ」なかった、とするのである。晩年定論によれば、「天」は「国の存亡、道の興廃」（『語孟字義』天命第九条）といった人倫世界全体に関わる事態について言われるものであり、『孟子』当該章論注によれば「（舜の後）上に堯舜の君無く、下に舜禹の臣無し。故に自ら賢に譲るの挙無く、永く世を継ぐの法と為る。蓋し時なり、勢なり。是れ即ち天なり。」とされる。禅譲から世襲への変化は、まさに「時」「勢」という「之を為ること莫くして為る者」として「天」の範疇において捉えられるものとされるのである。一方「命」は、人事を尽くして後、いかんともしがたく「時に臨んで」個人に訪れる「吉凶禍福」を言うものとされる。晩年定論においては、両者は明確に分離されるのである。これに対して初期形態を示す自筆本では、当該章において「天は全体を以て言う。命は民心の帰すと帰せざるとを以て言う」とされ、両者の間に基本的な概念上の区別が設けられていない。朱熹「集注」が「理を以て之を言う、之を天と謂う。人よりして之を言う、之を命と謂う」（当該章）とし、「天」と「理」とを基本的に同一視していることを勘案すれば、未だ宋学の影響から十分に脱却しえていなかったとも言い得るであろう。

(4)「告子」篇を中心に展開される「性」論（性善論）については、初期形態の自筆本から晩年定論の林本校訂文に至るまで、ほとんど変

化していないことを確認することができる。例えば「告子上篇」第二章論注には、次のように述べられており、その表現は自筆本とはほぼ同様である。「宋儒性を論じて本然・氣質の説有り。以謂えらく、本然の性は全く善にして悪無し。孟子の所謂性善は是なり。氣質の性は乃ち善悪雜じりて言を為す。夫子の所謂「相い近し」（『論語』陽貨2）是れなり、と。此の説、一たび出て万世易うること能わず。其の言、惟孟子の旨後世に不明なるのみならず、且つ孔孟一家同脈の学をして支離決裂、殆ど相い入れざらしむ。噫。蓋し孟子の言は即ち夫子の旨、豈に二有るを容れんや。夫れ水は固に清濁甘苦の異なること無きこと能わず。然れども其の下に就くは一なり。性固に昏明強弱の殊なること無きこと能わず。然れども其の善為るは一なり。「今人乍に孺子の將に井に入らんとするを見れば、皆な怵惕惻隱の心有り」（公孫丑上6）。「一筆の食・一豆の羹、之を得れば則ち生き、得ざれば則ち死す。嚙爾として之を与うれば行道の人も受けず、蹴爾として之を与うれば乞人も屑しとせざるなり」（告子上10）。豈に、性昏明強弱の殊なること有ると雖も、然れども其の善為るは一なるに非ずや。此れ孟子性善を論ずるの本指にして、夫子の言を發明する者なり。蓋し氣質の中に就きて其の善を論ず。氣質を離れて言を為すに非ざるなり。其の「人性の善なる、猶お水の下に就くがごとし」と曰うを觀れば、則ち其の発用に就きて之を論ずること知る可し。若し性を以て理と為し体と為すときは、則ち猶お水の地中に在るがごとし。豈に之を流れて下に就くと謂わんや。」上述の(1)と併せて、仁斎学の出発点が、宋学の「性」理解に対する批判にあったことを示すものだと言える。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

遠山 敦、『日本靈異記』の親子像、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十七号、2016、pp.107-126

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

遠山 敦 他、三重大学出版会、愛の探究、2017、176 (153-165)

遠山 敦 他、勉誠出版、忍者の誕生、2017、305 (39-53)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

遠山 敦 (TOHYAMA, Atsushi)  
三重大学・人文学部・教授  
研究者番号：70212066

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )